

「関西奉中連に出席して」

先日、大阪で開かれた奉中連では久しぶりに七期級友諸君にお目にかかり、懐かしく、また半世紀を経たそれぞれの顔を見ていろいろと感慨に耽りました。金連賛氏の「ヌルハチ」の講演は誠に興味深く、清朝の始まりから私たちが少年時代を過ごした満州国の時代への流れを歴史的に結び付けてくれました。金氏の話は今回の奉中連を大変に意義深いものにしてくれました。お世話下さった今井君ら役員の諸氏に深く感謝します。私はこの講演を聞き、また七期同級生諸君にお目にかかり、私なりの過去への思いとともに、改めて人生および世の中への回顧を持ちましたので、その一端をここで述べてみたいと思います。

1. ヌルハチと明朝の滅亡

金氏の話しにもありましたように、ホンタイジが明を攻めたとき、山海関を突破し、北京を占領できたのは、山海関を守る明将呉三桂の裏切りが原因でした。なぜ彼が明を裏切り女真軍についたのかについては説があるようです。大義名分は腐敗した明朝を滅ぼすためであったと言われますが、もっと人間的な、あるいは案外とつまらぬ動機が彼の行動を決め、それによって中国の歴史が大変革を起したとも言われております。どれが本当の理由だったか専門家でないとい何とも言えませんが、案外ありそうなことのように私には思えます。

その話しはこうです。呉三桂が山海関の守備を命じられ、北京を去ったとき、その愛姫である陳陳円を北京の父の屋敷に預けて出征しました。ところが、その留守中に李自成の反乱軍に父は殺され、愛姫は反乱軍の将の手に落ちたわけです。呉三桂はこの報を聞き、大いに怒り女真軍に降ってこれを手引きし、李自成軍を討伐して北京は清軍の占領するところとなりました。こうして明朝は滅亡し、新たに清朝が成立しました。つまり大義名分はともかくとして、愛人を奪われた報復のために国を裏切った一将軍の行動が原因となって明が滅んだと言うわけです。一国の運命がこのような些事によって決定されることは実は過去の歴史によくあったことではないでしょうか。

2. 原因—その真と偽

この呉三桂の話しが事実かどうかは別として、歴史上の出来事の記録には、時の為政者がえてして奇麗ごとを後世に残したいために、彼等に都合のよいようにした作り話の類が多いようです。有名な例が「史記」でしょう。時の皇帝の意に逆らって歴史としての真実を正確に記録するため、父のあとを継いでこの仕事を進めつつあった司馬遷は、逮捕され死刑か宮刑かの選択を迫られました。彼はその仕事を完成するため、敢えて屈辱的な宮刑を選び、彼は「史記」を完成しました。歴史的事実は確かに存在し、それは「史記」の例のように正確に記録することは出来るはずです。ある人物が、何時、何処で、どの様に、何をしたかは、事実として明かであり、必要なら記録もできます。しかしながら、この人物が“何故”その行動をとったか、あるいは、ある歴史的事実がどうして生じたのか、つまりある事実の動機あるいは原因は、はっきりしない場合が多いようです。例えば、過去の世界史的な出来事、それぞれの国の出来事、あるいは私たち自身の過去の行動について思い返してみても、動機あるいは原因のはっきりしない場合が多いことがわかるでしょう。

日本の敗戦を決定的にしたのは広島・長崎に投下された原子爆弾だという考えがあります。私はアメリカが日本に原子爆弾を落とした、この表向きの理由を信じてはおりません。戦争の犠牲者を増やさないため、一日も早く戦争を終結させるため、とアメリカの大義名分は「本音」ではないでしょう。ソ連やナチスドイツと競争し、漸く完成した原子爆弾の近代兵器としての威力を確認するため、すでに戦争の帰趨のはっきりしていた8月にアメリカ政府は日本国民を動物実験にしたわけです。その本音は人種差別とその獣性にあったとしか思えません。ソ連軍の満州侵入も同様です。戦争終結のためという大義名分どころか、餌にむらがる秃鷹のようなソ連軍の暴虐ぶりは人類の恥辱そのものです。

戦後の日本で起った大きな出来事に大学紛争があります。東大の医学部から発生した紛争はりょう原の火のように全国に広がり、団交、封鎖、安田講堂、北朝鮮へのハイジャック、浅間山山荘などと続きましたが、実は中国の紅衛兵の「造反有理」を表面的に真似したことに始まると言われています。これも「建て前」と「本音」がありました。前者は、学問の進歩と民主主義を阻害する講座制（教授の独裁）を排除するという錦の御旗でしたが、実は権力を持たない若手教官や学生が、実力もないのに権力を獲得しようとしたことが目的であったといえます。いわば権力闘争というのが大学紛争の実態だったと私は理解しています。さらに紛争を引き起こし、これを利用した左翼集団が民主化の大義名分のもとに大学を名実共に占拠しようと図っ

たわけです。このため研究教育が重大な支障を受け、その後長年にわたってその悪影響が残りました。「建て前」の美名に隠れた人間の低次元な本音の典型的な例が大学における「民主化」闘争の実態だと私は思わざるを得ません。

3. すべては「運」か

個人の歴史的事実についても建て前と本音の関係は大なり小なり似たような状況があるように私は思います。たとえば、私たちの中学生時代を振り返りますと、あの時代の「建て前は」はあくまで「大日本帝国」のために尽くすのが本分で、個人の利益や希望は陰に隠されていました。「お国のために」という大義名分が表向き幅を利かせていましたが、“七つボタン”や“短剣”の格好の良さに憧れたのが当時の少年の本音だったと思います。しかし、その実体は前時代的な集団生活の苦勞だったと聞きます。そして、この道を選んだ多くの級友たちが、価値観が180度転換した戦後になって苦難の道を辿ったことは私たちの直接体験で知るところです。

このような隠れた“ホンネ”が個人でも、あるいは集団でも、ある特定の行動や出来事の真の動機や原因であることは、むしろ一般的ではないでしょうか。それがどのような結果をもたらすかは、初めは誰にもわかりません。私は個人であれ、国などの集団であれその行動と、それによってもたらされる結果は、いわば起るべくして起る我々の理解を越えたもので、何か「運命」に操られたもののような気がします。呉三桂の裏切りは明朝の末期、原子爆弾投下は大東亜戦争における日本の劣勢、大学紛争は中国の文化大革命（これに続くパリ大学革命）など、どれを見てもこれらの事件がちょうどその時に起るべくして起るタイミングだったように思え、これが“運命”のようなものかも知れません。大東亜戦争という時代に多感な少年時代を生き、敗戦と戦後の民主化という価値観の大変革を経験した私たちの世代は、文字どおり運命に翻弄されたと言えます。反面、この激しい変革の時代に生き、得難い経験を持ったことは幸運だったとも考えられませんか。皆さんはどうお考えでしょうか。

4. これからの日本

ソ連が突如崩壊し、ドイツも思いがけず再統一されました。東西の冷戦構造が崩れるとともに新たな国際紛争が起っています。人間とは全く厄介なもので、このようなことで果たして人類の目指す「世界平和」が実現する日が来るのでしょうか。世界の各国が本音のエゴをむき出しにして相争う現状を見ますと、「世界平和」という建て前どころでないのが今の世の中です。国内の周囲を見ても贅沢に慣れ、何事にも無関心で何等の世界観も持たず、倫理観の乏しい今の若年層を見ていると、日本の崩壊も近いかと暗然たる気持ちになります。しかし、この現状は軍国主義だけでなく戦後移入された民主主義の欺瞞的な「建て前」的行動のもたらした運命的な帰結かも知れません。小は私たちの周囲、町、社会、大は国そして世界に私たちは何か本音で貢献できることがあるのでしょうか。それとも自分たちのことだけを考えて、老後を安穩に過ごす計画を持ちたいと言うのが本音でしょうか。難しいことですが、それでも私たちは一定の世界観をもち、人類の理想を目指すという建て前だけは持つべきだと私は信じております。たとえどの様な運命が私たちの行く手に待ち受けているとしても。(砂丘、5：11-14、1994)